

## 退職なさる先生からのメッセージ

### 幸せを満喫した十六年間

倉石 あつ子

私は気付かずにいたのだが、二人の方から「これってあつ子さんですよ、応募したら…」というご連絡をいただいた。それが、跡見学園女子大とのご縁ができる始まりである。連絡をいただいたので早速公募条件を確認したのち、応募し、雇っていただけることになり、平成一年四月一日から奉職させていただいた。公募の条件はもう忘れてしまったが、奉職時五四歳（以下がついていかどうかは忘れた）、女性関係の研究をしている ということであったように思う。その年は別の大学でも公募があり、勧められてそれにも応募したが、そちらは面接もしたが、結局誰も採用すること無しに数年が過ぎていたので、本学のこの応募はものすごく良い確率であったといえるし、まさに「縁があった」ということである。もちろん、採用側の裏ではいろいろなことを考えての公募条件を出していたことなど、その時点では知る由もない、組織に疎い「オポコ」であった。第一、それほど就職ということに興味を示さず、放送大学・東京農業大学・東京学芸大学・杏林大学の非常勤をしつつ、博物館等の展示を主たる仕事とする丹青社などの仕事 特に博物館建設のための基礎資料調査などをしたり、一九八〇年代全盛だった各地の自治体誌などの調査・執筆に明け暮れる、いわゆるブータローの毎日を送っていた（ほぼ毎日出かけていたので、近所の人々はどこかに勤めていると思っていたらしい）。

バブリーな時代だったから、一日調査に行くとい万円以上の報酬入ってくることもあり、楽しい調査をして報告書

を書けば原稿料も入る。そして空いた時間で自分のテーマである女性関係の調査・研究もできるという、今考えるとまさに自分の使うお金くらいは稼げて時間は自由に使える「自由人」の生活を長く続けていたことになる。民俗学会内で口の悪い人たちから「三ババ」と呼ばれた同好の士(?)と、「主婦論研究会」なるものを定期的開催できていたのも、三人が三人ともフリーで居たからこそできたことである。本当に貴重な時間をもてた時代であったし、二ヤつく程「美味しい時代」だったともいえる。

そんな自由人が組織の一員に組み込まれ、四学科時代の文化学科の所属となった。授業は勿論、与えられた校務分掌などもこなさなければならぬ。授業は非常勤でやっていたことだからそんなに大変ではないが、校務分掌はそんなことをするのは生まれて初めての経験である。最初は本当に一からの出発で、与えられた仕事(それも今考えると簡単な仕事だった)をこなすだけでも、毎日大変であった。親切にそれとなく教えてくれる何人かの教職員に支えられ、その年その年を過ごすことができた。傍から見れば充分な働きをしているとは言いがたかったと思うが、今となってはお許しただくしかない。当時、新年度の最初のガイダンスで学科ごとに教員紹介が行われ、その席で「成城あたりの深窓の奥様風…」と紹介された。その内容が面白くて、一年ぐらいいはその雰囲気を保とうと思って、無理して装ってみたが、土台無理な話である。また、スーツやワンピースなどを着るのも、どうも苦手である。二年目ごろになると「成城あたり」はすっかり影をひそめ、次第に田舎風の地が出てきて「成城あたりの深窓の奥様風…」とは紹介されなくなった。そして、いつしか学生たちの間には、「口が悪い」「あつ子は怖い」などという風評がはびこり、それは現在まで続いている。まったくこんな風評を立てる根拠が分からない、と、思っているのは私だけか。

たぶん、ストレスのためと思われるが三年目の秋、ベル麻痺になって右顔面がいうことをきかず、一カ月ぐらいい喋るのも不自由したが、学生たちは笑いもせず、いくつかできない発音は板書することによって解決する私を「頑張り」と励ましてくれた。当時、民俗調査に出かけて寝食を共に数日を過ごしていた演習履修の学生たちが中心になって助けてくれたのは、忘れられない思い出である。

やがて四学科は人文学科に統一され、その頃から学務関係の仕事させられるようになり、さらに高校訪問・出張授業などの仕事も増えた。そして、評議員・学部長などを引き受けさせられることとなり、これらは自分でも何かなんだか訳が分からないうちに、「そのようになっていた」と言っている。特に学部長はまったく予測もなかったことだし、望んでもいなかったことである。学部長選は何回か開かれてまったく立候補者がいない状態が続いた末の最終日、取り囲まれて立候補者として「うん」と言われ、それらしい立候補の弁を述べたような気がするが、心中は複雑である。もちろん、そんな役割が自分にできると思えないことが一番であるが、泣きたい思いで「うん」と言ってしまった弱い自分に対してでもある。そして結局は「できることしかできない」「自分としてやれるようにしかやれない」と覚悟を決めるしかなかった。学部長立候補の弁（立候補もしていないのに立候補の弁とはおかしなものだが）を述べているときに突然雷鳴がとどろき、大雨が降り始めたのにびびくりし、あまり予測・運命・占いなどを信じない私も、これは先行きを象徴しているのかと思った。また、推薦者のI先生が「男気を出してお引き受けいただき」とおっしゃったその内容も、忘れられない一場面である。そして、私にとって二年間はまさに波乱万丈であったが、教職員の方々に支えられた二年間でもあった。

次の学部長を決める時も同様のことが起き、なかなか候補者が決まらない。何回か開いた選挙会の最終日、ようやく候補者を決め、選挙に入るといふその時、母が亡くなったという連絡を受けた。施設に入所して四年目を迎えていた母は、このところ食欲が落ちていつどうなってもおかしくない、という状況ではあったが、よりによってこの日とは。同級生の施設事務局長からさまざまな連絡電話が入る、その対応もしなければならぬ。教授会の学部長席の後すみにかがみこんで電話をする姿を目撃されなくなかったが、何か突発事態が起こっていると気づいた方も多かったようである。二〇〇八年十二月一〇日はそうした出来事があった日として、忘れられない日となってその時の情景とともに私の心に刻まれている。そんな出来事ばかりが記憶に残り、学部長として何をしたらか、と問われても何をしたらのか思い出せないし、思い出さなくてもいい。要は、そんなことを自信をもって言えるほど駄目学部長であったという

ことであろう。ただ、私自身にとってこの二年間の経験は、多分、いろいろな面で活きており、特に民俗学会の運営をする理事の一員としての活動の中に活かされていたように思われる。人生無駄なことはない、と達観できるようになったのもこの頃からであろうか。これは、無理やり学部長職に就かせて下さった方々に、感謝しなければいけないプラス面である。

さて、今後の私的なことを言わせていただければ、四月一日から二人の老人夫婦が朝から晩まで一日中顔を突き合わせているという新たな生活が始まる。やらねばならないことも、行かねばならないところも全くない。これが良いのか悪いのか？七〇歳の先はまさに霧に包まれているようで、まことに不透明である。細々とも調査や研究が続けられること、生きている限りは健康で次世代の人々の負担にならないようにしたいと願っている。既に退職なさった先輩方を見習い、頭と体を適度に使いながら、残りの人生を少しでも充実したものに出来るよう心がけたい。この一六年間を振り返ると、その時間は研究者として充実したものであり、幸せな時間であったといえる。研究室にあった研究書の多くは、キルギス共和国のキルギス人文大学でお引き受けいただき、日本語学科の学生たちが活用してくれらることになったのも、幸せなことである。これも大学側の方々のご尽力があつてのことであり、感謝の念に堪えない。

跡見女子大学での一六年間の楽しい教員生活を支えて下さった全教職員の皆様に感謝し、篤くお礼を申し上げますとともに、大学のますますのご発展をお祈り申し上げ、退職の辞とする。

倉石 あつ子 (くらしいし あつこ)



略歴

一九四五年二月 長野県東筑摩郡片丘村に誕生  
 一九六七年三月 國學院大學文学部文学科卒業  
 一九七五年四月 長野県史刊行会調査委員(嘱託)  
 一九九〇年四月 放送大学非常勤講師  
 一九九三年四月 國學院大學日本文化研究所共同研究員  
 一九九四年四月 東京農業大学非常勤講師  
 一九九七年四月 東京学芸大学非常勤講師  
 一九九八年四月 杏林大学非常勤講師  
 一九九九年四月 跡見学園女子大学助教  
 二〇〇四年四月 跡見学園女子大学教授(現在に至る)  
 二〇〇九年一月 学位(博士 民俗学) 國學院大學にて取得

(以下省略)

【学会・および社会における活動】

◇所属学会

日本民俗学会 文化人類学会 比較家族史学会  
 相模民俗学会 長野県民俗の会 日本民具学会 等  
 日本民俗学会理事を五期勤め二〇一四年八月末日規定により任期満了

◇社会的活動

一九九八年十二月 荒川区文化財審議委員(二〇〇八年一月まで)  
 二〇〇二年四月 杉並区文化財保護審議委員(二〇一五年三月まで)  
 二〇〇二年七月 長野県文化財保護審議委員(二〇一一年八月まで)  
 二〇〇四年一月 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(二〇〇四年二月まで)

◇関わった自治体誌

大町市史・伊勢崎市史・軽井沢町誌・塩尻市誌・長野市誌・上越市史・習志野市史・南安曇郡三郷村誌・相模湖町誌・袖ヶ浦町文化財調査報告書・(千曲市) 武水別神社大頭祭他民俗調査等多数

二〇〇四年四月 埼玉県文化財保護審議委員（二〇一四年三月ま

で）

二〇〇五年四月 千代田区文化財保護審議委員（二〇〇六年三月

まで）

二〇〇九年二月 文部科学省文化審議会専門委員（二〇一五年三

月まで二〇一三―一四は部会長）

二〇〇九年四月 大学基準協会大学評価委員会専門評価委員会分

科会委員（二〇一〇年三月まで）

二〇一〇年四月 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員

（二〇一一年三月まで）

二〇一一年四月 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員

（二〇一二年三月まで）

二〇一一年三月 上田市文化財保護審議委員（二〇一三年二月ま

で）

#### ◇主たる著書

『北信濃の冠婚葬祭』（共編著） 一九八〇年一月 銀河書房

『柳田国男と女性観』（単著） 一九九五年十月 三一書房

『女の眼で見る民俗学』（共編著） 一九九九年一月 高文研

『人生儀礼辞典』（共編著） 二〇〇〇年四月 小学館

『老人と子どもの民俗誌』（単著） 二〇〇一年四月 岩田書院

『女性民俗誌論』（単著） 二〇〇九年三月 岩田書院

以下学術論文は割愛

（池上貞子氏との共同研究）「女性とモノ」

二〇〇一年四月 国立民族学博物館国内資料調査委員（二〇〇三

年三月まで）

二〇〇二年～二〇〇五年 科学研究費補助金基盤研究B（研究代

表者 國學院大學 小川直之）共同研究員「日本近代と折口

民俗学形成過程の研究」

二〇〇三年～二〇〇六年 科学研究費補助金萌芽研究（研究代表

者 筑波大学 中込睦子）共同研究員「草創期民俗学におけ

る女性民俗研究者の研究史的位置づけ」

二〇〇五年年度 跡見学園女子大学特別研究助成費（村松正隆氏と

の共同研究）「ある日本人の暮らし」に見る日本人の生活様

式の変化」

二〇〇七年～二〇一〇年 科学研究費補助金基盤研究C（研究代

表）「近代における女性教育と衛生観の形成―婦人雑誌情報

のデータベース化」

二〇〇九年年度 跡見学園女子大学特別研究助成費（伊藤稯氏との

共同研究）「教育研究への活用を目的とする写真画像を含め

た民俗資料のデータベースの考察」

二〇〇九年年度 跡見学園女子大学特別研究助成費（伊藤稯氏との

共同研究）「民俗調査におけるGISの活用方法の研究」

二〇一一年四月～二〇一四年三月 国立歴史民俗博物館共同研究

員「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変

化に関する研究」

#### ◇跡見学園女子大学における研究歴

二〇〇一年度・二〇〇二年度 跡見学園女子大学特別研究助成費